

佐呂間町開基 100年記念

ふるさと
のあじわい



佐呂間町郷土研究会

開拓の群像(九)

そろばんを歛にかえて

足尾銅山鉍毒罹災者移民団長

瀬下 六右衛門

さて 今日社会にて 悲惨の数は多けれど 渡良瀬川の岸にすむ 民にまされるものぞなし 濃美の地震は言うも更に三陸津波も悲惨なり さりとてこれらは天災で 人手で止まらぬ数のもの 鉍毒被害は人のわざ 人と人にて止むものを しかも乱暴果てしなく 人の命をたおしゆく (小田和生 作 戯曲 亡国の構図より)



中央が瀬下六右衛門

佐呂間、一〇〇年の歴史の中でも特異な移民団は、やはり明治四四年今の栃木部落に移住してきた、足尾銅山鉍毒罹災者の集団移民であろう。

問題の足尾銅山は江戸時代慶永一五年二人の農民によって発見され、徳川幕府直轄の銅山として栄えたのだが、後に衰えて廃坑寸前になっていたのを明治政府が民間に払下げ、明治一〇年 京都岡崎の庄屋兼商人の古河市兵衛が買取るや、にわかには銅の産出量が増加して遂には、全国産銅の過半数を占める日本第一の銅山にのしあがった。

群馬栃木両県の間を流れる渡良瀬川はその鉍山からの廃液が流されていた。相次ぐ洪水の度に、沿岸の田畑は汚染され、壊滅的な被害を被った農民は、時の栃木県選出の代議士田中 正造を先頭に抗議行動を起こしたが、時の国家権力と結託した財閥の壁は厚く一〇数年に渡り続いた。

冒頭の文書の様にまさしく人災であった鉍毒事件は、銅の生産と言う国策とも結び付、渡良瀬川沿岸の耕地に多大の被害を与え、被害農民を生活苦に陥れた。流血をも見た幾多の抗議行動は、田中正造の天皇直訴と言う決死的な手段により、一応の決着を見ることになった。

谷中村は、周囲一五キロの堤防と四キロにわたる天然の高台にかまれていたが、政府は、この谷中村一千ヘクタールを買い潰して、ここに人口湖をつくり、渡良瀬川と

利根川の洪水をここで調整しようとして計画した。結果、谷中村に土地収用法が発動され、強制買収、強制立退きが執行され谷中村は滅亡した。

そこで、その救済対策として、栃木県庁は、この谷中村を立退いた一部の農民と、鉍毒の被害を被った下都賀那南部八か町村の人達と一般の人達に、北海道開拓移民を斡旋したのである。明治四四年四月七日、募集に応じた第一次の移民団、六六戸二四〇名は、入植地に決定した、北海道当沸村サロマベツ原野を目標して故郷を後にしたのである。

瀬下六右衛門は、部屋村役場に奉職していた。人望もあり事務一般にも堪能していた、六右衛門は、村の財政を切り盛りする収入役に推挙されたい。部屋村も他の被害村と同じく明治二三年、二九年、三一年と相次ぐ大洪水の度に、田畑は鉍毒の被害を受け村の財政は窮乏していた。

追い打ちをかけるように、明治四三年八月関東地方を襲った大洪水は、渡良瀬川沿岸の農民を致命的な惨状に追い詰めた。

村の理事者の一人として、六右衛門は、村民の鉍害による惨状を見聞して、田中正造の抗議行動には同調しながらも、村民の救済より具体策を講じなければと心を傷めていた。北海道移民の話が出たとき、新天地に希望を託すのも良策だと思つた。

立場柄、移民希望者の相談役でもあり又、取りまとめを担当しなければならなかったから、いつの間にか北海道移民に深く関わる羽目になってしまった。

明治四四年と大正二年と二次にわたる移民団の内、部屋村出身が合計八八戸中四一戸と圧倒的に多いのでも、推察出来る様に、六右衛門自身、熱心な移民推進者であったと思われる。強制立ち退きの谷中村は二番目に多く十七戸を数え、その中に、村長の茂呂近助もいた。移民計画を進めるなかで、六右衛門がなかなか行かないと言う者も出てきた。村の収入役と言う安定した職場を捨てて、六右衛門は自らも、団長として北海道開拓に参加する事になる。

何故、谷中村の村長が居ながら、六右衛門が団長になったのか、定かでは無いが、上記の理由もあったと推測される。

移民団の一行は、明治四四年四月七日、小山駅から臨時列車に乗り込んだ。

移民団の他に、栃木県庁等から、役人六人が同行し、日本赤十字栃木支部から医師一名に看護婦二名も連れ添った。

県庁の永い間の懸案事件であった、足尾鉾毒罹災者農民の救済移民であったから、県も万全を配した感がうかがえる。

一行は、途中、青函連絡船内で船火事に遇うなどしながら、一二日現在の池北線で陸別駅に着き、このあと貨物列車で途中、脱線事故に遇うなどしたが無事、現在の北見市に到

着後、道庁の仕立てた、駅通の馬車で留辺蘂まで来て、後は、当時の中央道路だった今の丸山峠を徒歩で越え佐呂間の武士に到着している。

関東平野に生まれ育った彼らにとって、腰まで抜かる雪の峠越えは、想像を絶していたわずかの家財道具を携えて、年寄り幼い子供のみ馬籠に乗せ二二キロの道のりを、どうやら乗り越えて、目的地に辿り着いた時は、疲労困憊の態であった。

既に、留辺蘂に到着するまでに落伍者が相当数でたという。

団長の六右衛門も、前途の多難を予感していた。

取り合えず六右衛門達は、早速、開拓の準備に取り掛かった。

先ず、武士小学校(若佐小学校)内に事務所をもうけ、四キロ先に用意してくれた笹葺きの三棟の着手小屋にその年の秋迄、共同生活をして入植準備をした。

入植地は出発時点で既に決定して居たが、洪水被害を痛いほど味わってきた彼らは、高台、高台と希望して、予定より山際に入植する事になる。

厳寒の冬は、かって体験したこともない凄まじいものだった。

多くの移民仲間、脱落して去っていくのを六右衛門は、留まるよう説得した。

しかし、第一次移民団は一年目で早くも二〇名もの離農者を出している。

六右衛門の、この北辺の地佐呂間を第二の故郷にとの決意はかたかった。

大量の離農者の穴を埋める為に、大正二年四月にいったん帰り、再度移民者を募り、第二次移民団、三二戸を引率してくる。

だが、翌年大正三年には、更に二〇戸の離農者と八名の除名者を出している。

六右衛門は、前身は村役場の収入役であったから、自分達が今の境遇にあるのが、足尾鉾山の鉾毒被害によること、その責任は、経営者のみならず、放置した国にある事を、見抜いていたし、当然、県にたいして、救済の策を再度、要求すべきと言う主張をしていた。

除名者の中には、その団長の意思に反対した者もいたようであり、栃木移民団体の特殊事情が反映している出来事であった。

その後の、幾度にわたる、国に対する、帰郷のための土地払下げ要請が、示すように、



瀬下六右衛門の着手小屋と当時の家族

移民者の多くは、帰郷の念を、捨てきれずにいた。部落名も栃木とつけて、故郷を忍んだ。六右衛門はそうした中、故郷からの日光山多聞寺の移転運動、学校創立運動にも中核的役割を果たしている。

他県からの入植者も増加しだし、部落も、形も整い六右衛門は、代表者として、村会議員におされる。

当時の六右衛門を知る逸話がある。

故 河野勝高は、明治末期に一五才で下武士(朝日)に入植、生前には、村議、議長、社会福祉協議会長などの公職に着かれた人であったが、若佐郷土史「わかさの人々」の聞き取りの際に、徳永良行に六右衛門について次のような話を聞かせてくれたという。

「栃木の移民団長で来た、瀬下六右衛門という男はたいした人だった。」

わしが、二〇才頃だった。中佐呂間に用があつて出かけて目撃した出来事がある。

夕方のこと、役場から村会議員がワアワア言いながら出てきた街にあつた「喜多見屋」と言う料理店に入つていった。

料理店の中で喧嘩が始まった様子、わしも若かつたら、野次馬根性で何人かの連中と中を窺っていたものさ。

酒も入った風で、何人かがもつれあいながら外に出てきた。

その内の四人が取っ組み合いの殴り合いを始めた。おそらくは議会でのもつれの続きで

もあつたのだろう。

そうしたら瀬下さんが落ち着いた姿で出てきた。髭を生やした人だった」

「もう、いい加減にやめろ、男が何時までぐちぐち喧嘩してゐるんだ。村長さんの話では、今、配分の無かつた部落は、半年ぐらい遅れるだけと言つたではないか。喧嘩やめろ」瀬下さんが一喝したら、四人はびたりと殴り合いを止めたんだから。その事があつてから、瀬下さんとゆつくりと話し合う機会があつたが、栃木県に居たときは村の収入役だつたと言つていた。

足尾銅山の鉍毒の被害民を引き連れて、寒い僻地の北海道に、団長となつて来たんだから、人々を、纏めて行くかなりの人格があつた人だった。

内地栃木県の鉍毒に土地を含めた財産を失つた不満だらけの人々の多いあの栃木部落の開拓を成功させているのだから。

ゆつくり身の上話を聞かされた時、収入役をあの、明治の時代にやつていたということでも、学問の有る人だと思つて感ぜられた。わしも(河野)北海道に来て、一年間、近藤さん所で百姓奉公をして、その給料を持って東京で一年間夜学に通つたが、また、色々本も読んだが、瀬下さんの話は、一般の人より一段上だつた感じがしたな。

近藤直作さん(明治四〇年から、今の富丘近辺に農場を経営しキリスト教の教えを経営にも実践した創始的な人物)にも負けないく



栃木神社男オンコ全像



栃木神社女オンコ根元

らい学問があつた。

栃木県で、役場勤めをしていたら、荒地の開拓等しなくても、楽に食べていける人だつたが。北海道の原生林を伐りひらいて団長として苦しいことがあつても、苦しい顔は出来ないとやつていた。

瀬下さんは、身の上話を聞かせてくれたとき愚痴らしいことは、何一つ言わなかつたが、それも、嫁さん(奥さん)が偉かつたんだな」と、そんな風に瀬下六右衛門の人となりを語つてくれたと言う。

栃木部落の学校と多聞寺の建設費は当時の部落民全員の道路の掘削工事の出役で得た労賃の拠出で賅ったという。

それぞれが苦しい時代、子弟の教育の場所、信仰の拠り所をいち早く求めて、数少ない喉から手の出る程手に入れた現金収入を、こぞって提供した、栃木部落の開拓者達、その中に、六右衛門の信念と理想が重なって見える様な気がする。

六右衛門が亡くなったとき、部落の児童全員があつまり野辺の送りをしたという。

時は第二次大戦の最中で二月の事であった。その日は、例年にもない大雪のある日であったという。六右衛門の臨床の耳元に、故郷の八木節の囃子が聞こえていたかも知れない。

語り手

河野 勝高

徳永 良行

沼本 静恵

文責

上伊沢 洋

参考文献

栃木郷土史

栃木県史

戯曲

亡国の構図

(小田和生作)

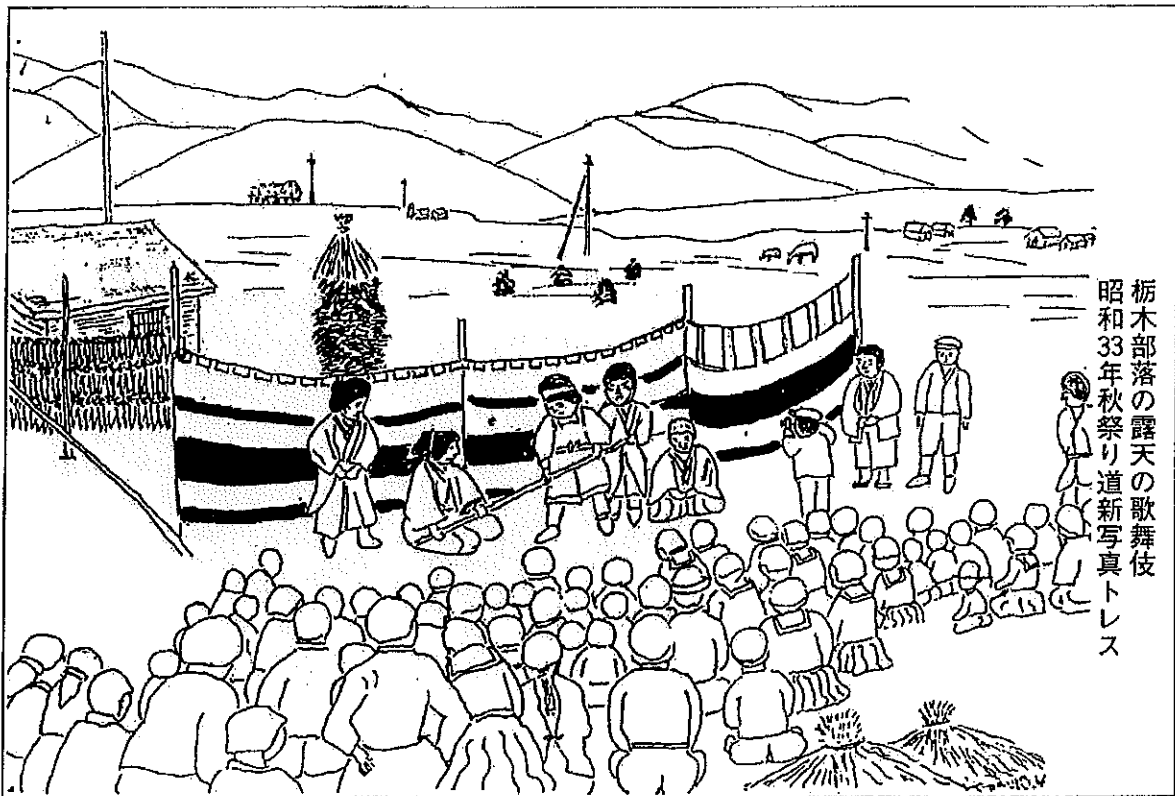
栃木部落歌舞伎

栃木移民団長瀬下六衛門の記事に関連して、栃木の歌舞伎を照会してみませう。(道新昭和三三年一月二四日掲載コピー提供眞鍋岩太郎)。歌舞伎の指導者は川島平助、衣装、小道具手造り、栃木部落定着後、農民歌舞伎として開拓当時から、娯楽として、佐呂間村内ばかりでなく、近隣町村にも招ねかれて、人々を楽のしました。

栃木の秋祭は、昭和四〇年過ぎ頃まで盛んに行なわれたという。

川島平助は、明治四四年佐呂間村栃木部落に移住したときの年は、三七歳であったという。下のイラストは、道新の昭和三年の歌舞伎の記事と共に、露店で歌舞伎の写真が、コピーのため判りづらいので、トレスしたのです。

文責 徳永良行



栃木部落の露天の歌舞伎
昭和33年秋祭り道新写真トレス

鉍毒に逐れて

特

(足尾鉍毒移民)

集

連作版画展◎佐呂間町栃木地域の歴史

小口一郎作◎●◎ (小池喜孝・解説)

提供は元留辺薬郷土史研究会長

谷口重雄氏

北見の版画展にて許可の上撮影のこと



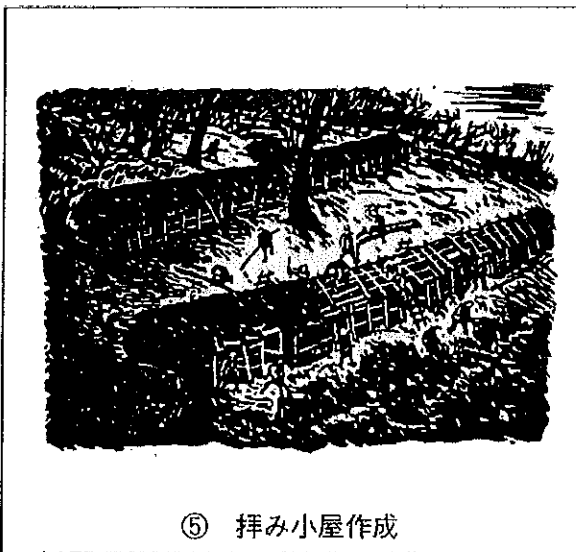
① 移住民の出発



③ 先住者の民家に分宿



② 北海道移住



⑤ 拝み小屋作成



④ 股を没する雪の中を



⑦ 人の住む土に



⑥ 巨木の始末



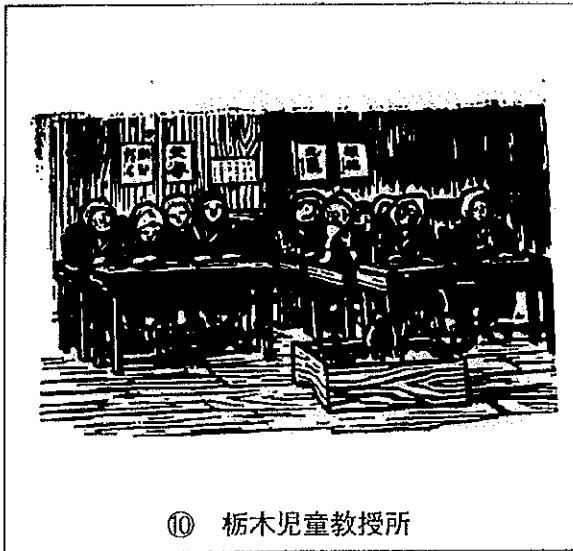
⑨ 生活の知恵



⑧ 雪中作業



⑪ 八木節故郷を偲ぶ



⑩ 栃木児童教授所

下野新聞（明治四四年四月七日）

北海移民を送る

下都賀（しもつが）郡南部一町六箇村の水害で生活に困窮している人々は、今朝、小山駅を出発して北海道移住の旅についた。住慣れた墳墓の地を去り、親しき生まれ故郷を離れて一念起生、ここに困りきった挙句の活路を歩もうとする一行の心情を察すれば、誰が納得いくというものか。

離別することが非情であるとの思いは、いつの時代になっても人情である。しかし、私はこれら一団を見送るにあたって、この（国が関与するような）経緯には奥深いものがあると共に、このような悲しくいたましい気持ち呼び起こさせる一つひとつの事情に思い至らないことはできない。

移民と称した開拓という言葉の裏には、主に人口の再配分と不毛の土地を征服する（北海道を日本の領土と決め付ける）意味があると思え、移民奨励の声は、まず過剰人口の整理という特別な目的から始まったものである。

もっと厳格に言うならば海外出稼ぎと同じことである。一口に移民といってもその本質はある期間内の移住に過ぎないことで、本当の意味での移民といえるようなものではない。

このことから栃木県南部の水害地の移住民を見ると、どう考えても移住することを余儀なくされた背後の事情には腹立たしいものがある。

勿論、県南の渡良瀬川沿いの集落はどこも水害の危険性があり、年々水害が頻発する事態になっている。

中央政府が提案している沿岸四県におよぶ渡良瀬川改修工事は、住民の得失があることはさておき、改修工事が

完成すると、下流の利根川の改修工事とあわせて、県南部、渡良瀬川の流域の土地は当然復活することは間違いない。

すなわち近未来における治水対策の約束は土木技術の進歩がなせる業である。

このような10年ほど先の見通しを棄ててまで、一団を北海道に送らざるを得ないような事情には、単に移民団への同情以上のものがある。

更に意味深き同情を注がなければならぬのは、移民の一団は渡良瀬川改修工事に反対する住民ばかりだからである。

改めて言わずとも、今回の件はここに至りつくのである。

しかし、この事態を変えるようなことは、事情が事情であるだけに如何することもできない。七十一戸、二四〇余名の人数は少しも少ない人数ではない。

海の北からは冷たい風が吹きつけ、波が高く渦巻く場所、雪と戦い、氷を踏みながら未開の地を開拓することは、農耕の尊い独立を意味するものである。

下野の国は寒さが残るもの今は桜の花が咲く季節で花見客が訪れるのを待っている。

故郷の花に背を向けて住み慣れた地を去り、異郷の住民となる者の胸中は誰が理解できるであろうか。

しかしながら、花が咲いたり散ったりすることから、人の苦楽起こりまで誰も知る由もない。

北海の地寒しといえども、異郷の地を見ることは楽しいものでもある。

目的地に行つて、一心に健闘せよ。汗の償（あたい）は、即ち富なり。